

目に映ったモノは朱色あかをしていた。

それは床を伝い、私の着物を同じ色に染め上げた。

「……うつ」

突然胸に痛みが走り、私は床にくずおれた。痛みは酷く、意識が遠くなる。呼吸も満足にできない。

けれど、そんな苦しさよりも、一つの思いの方が私の心の中を占めていた。

許さない。

薄れゆく意識の中、私は呟いた

「××××」

ふわり、と風がスカート揺らす。薄紅色の花が舞う。私——藤ふじ

井深幸いみゆきは、暖かい春の日差しの中、大きく深呼吸をした。

「ふわあ、いい天気だなあ。絶好のお昼寝日和だ」

「深幸、入学式の途中で寝るなよ」

いつの間にか隣にいた牧野零まきのれんが私の頭を小突いてきた。

「まったく、お前はいつも寝ることばかり考えているな。先生も呆れていたぞ、まあ、俺はそれがお前のいいところだと思っけどな」

につ、と人好きのする笑みを浮かべて彼は言った。茶髪、ピアス、着崩した制服と、見た目はチャライのチャライに良いことを言う。見た目はチャライのチャライの。

こいつは私の幼馴染で友人だ。親同士の仲が良く、家族と一緒に出掛けたりしていた。そのせいか、高校二年生になった今でも一緒にいる。

「まったく、何で入学式に出席なんかしなくちゃいけないんだよ。本読みたいのに、時間が取られるじゃないか。あー、式るとき読んじやダメかなあ？ 続きが気になるんだよ、島田莊司」

こいつ：私には寝るなとか注意しておきながら、自分は本を読みたいとかめかしやがる。なんて奴だ。

こいつは年下と同年の女子からとてもモテる。チャライ見た目からは想像できない真面目な内面、そしてこの読書好き。こいつのギャップに萌える女子はそれこそ星の数ほどいる。

対して私は、硬質な黒髪に、きっちり着込んだ制服。もちろんピアスなど開けていないし、開ける気もない。そんなきっちりした印象からは想像できない、いつでも寝たがるという性質。幼馴染とは真反対である私は、先生受けも悪いし、モテもしない。——いやモテる必要はないのだが。

「あ、もうそろそろ入学式が始まるぞ。」

「え？ああ、うん」

物思いにふけていたら、零が肩を叩いてきた。私たちは体育館の方に歩き出した。

「新生入、入場」

ぱちぱちと拍手が鳴り響く中、緊張した面持ちの一年生たちが入場してくる。私は隣の零とこそこそと指遊びなどをしていた。

「零、覚えてる？」

指遊びをするのを止めて、零の方を見た。

「何を？」

零もこちらを向いて、不思議そうに訊いてきた。

「昔、小さなころ、私に変な夢を見ていたこと」

「ああ、あれか。目の前に死体があるとかいうの。随分前に見なくなったって言ってなかったっけ？」

零は、予想してないところから切り込まれたからか、とまどつたように眉根を寄せた。

「そうだったんだけど……この頃、また見始めたのよ」

私は、小さな頃毎日のように夢を見ていた。それは、零が言っていたように人が死んでいる夢だ。目の前に着物を着た若い男が寝ていて、近寄って見ると、死んでいた、というもの。真っ赤な血が流れる様子や、男の見開かれた目が現実のような雰囲気纏って、夢に現れるのだ。小さかった私は毎回泣き叫び、しかし、夢の内容をうまく説明できなくて、両親を困らせた。

そんなことが小学校に上がる頃まで続いた。見なくなったときは、私だけでなく両親も喜んでいた。

それが、今、

「また見始めたって……何で？」

「分からないよ。でも、何か意味があるような気がしてならないの」「そんな、思いすぎだろ。ただの夢じゃないか。確かに小さい子が見るものにしてはちよつと……残酷だけど、それだけだろ」

私もそう思いたい。けれど、これは意味があるのだと、心が騒いでいるのだ。

「でも、じゃあその意味って何だよ。着物の若い男なんて時代錯誤も良いところじゃないか」

零は納得できなさそうに言った。そりゃそうだろう。誰が、心が騒いでいるからなんて理由で信じるだろう。それでも話を聞いてくれる零はやはり優しい。

「私、思うんだ。これは私の前世の夢なんじゃないかって。だってそう考えたら分かるんだもん。小さい、死なんて意識してない子が死んだ人間、それも知らない男の夢を見るのが」

「前世って……普通、前世の記憶はないはずだろう？ 前世だとしたら、お前は目の前で誰か殺されて、自分も死んだことになる。そんなことが何でお前の前世の身に起きたんだよ。それに、小さい頃に見ていたけど、一旦止まったんだらう？ 何でまた見始めたんだよ」

「何でって……ていうか、質問しすぎ。頭がこんがらがってきたよ」
零はよく私を質問攻めにする。本人はただ疑問に思ったことを訊いているだけなのだが、頭の容量の少ない私はすぐ分からなくなってしまうのだ。

「あ、ごめん。……確かに前世のときの夢だと考えたら、小さい頃見ていたことは分からなくはないな。でもそうだととしても、謎が多い。このことは置いておこう」

「うん……」

納得はできなかったが、考えすぎて頭がパンク寸前でもあったので、その時はそれで終わった。

退屈な式が終わって、体育館から出た。二年生は体育館の片づけ

をする人以外は特に用事はないので、すぐに帰る人が多い。私と零も校門を出て、何を話すでもなく歩いてた。

ふと、零が立ち止まった。いきなりのことで、私は止まり切れずに二歩三歩とたたらを踏んだ。

「どうしたの？ 零」

振り返って問うと、零が指をすつと伸ばした。彼の指し示す方を見ると、そこには橋があった。

「ただの橋じゃない。何もないよ」

「いや橋じゃなくてその向こうの木！ 人がぶら下がっているんだよ！」

言われてもう一度、今度はよく目を凝らして見てみると、なるほど確かに人が木からぶら下がっている。というかあれは、木に引っかかっていると聞いた方が正しいかもしれない。

「ていうか、人？ え、ちょ、人が木に引っかかっているよ！ 零、早く助けなきゃ」

「お、おう！」

思い出したように、急いで橋を渡る。息がすぐに切れる。運動不足ではないはずなのだが。零とどんどん差が開いていく。もつと運動した方がいいのだろうか。そんなことを考えながらも急ぎに急いだ。

木には見間違いなどではなく、少年が引っかかっていた。疑問を飲み込んで木から降ろすと、その少年は大きく息をついた。よく見ると、私たちと同じ高校の制服を着ている。土や枯れ葉がついてはいるが、真新しいことが分かる。新入生だろうか。

「訊きたいことは沢山あるが、とりあえず大丈夫か」

零が手を差し出して彼を立たせた。そして服についた汚れを払ってやる。世話好きなお母さんという雰囲気か漂っている。なんだか負けた気分だ。

「あの、あ、ありがとうございます」

彼は深くお辞儀した。感心な子だ。

「いやいや。あー、なあ、何で木にぶら下がっていたのか聞かせてもらっても良いか？」

零が、安心させるような笑顔を浮かべた。そこで私はやっと気づいた。少年が緊張した顔をしていたことに。まったく、零は人をよく見ている。

「あ、その、猫が木に登って降りられなくなっていたので降ろしてあげたんですけど……」

「自分が降りられなくなっただけか」

なんてドジな子だ！ 今時いるかな、こんな子。

「おい、深幸。お前、今関係ないこと考えていただろ」

「いや、関係なくはないよ、多分……」

呆れたような声に、肩をすくめて答える。すると、小さな笑い声が聞こえた。見ると、少年が肩を震わせて笑っていた。

「どうした？ あ、こいつはいつもズレてるから。気にしないでくれ」

「いえ。お二人は仲が良さそうで見ていて楽しくて」

笑い方が女の子みたいだ。失礼だとは分かっているけれど思ってしまう。

「まあ、大きな怪我がないみたいで良かった。気を付けろよ」

零が、大きく微笑んで少年に背を向けた。

「あ、はい。えっと、お名前を訊いても？」

「ん？ ああ、俺は牧野零、で、そのボケ女子が藤井深幸だ。お前は？」

「ちよっと、ボケ女子って何よ。失礼な」

思わず言い返すと、ボケ女子だろ、と言い切られた。

「俺は、たかみなお鷹見尚と言います。本当にありがとうございます」

少年——尚はまた深くお辞儀をした。そして顔を上げた。

そのとき、初めて彼と目が合った。すると、

(何？ この感じ。気持ち悪い)

心の奥底で自分でない何かか喚いている、そんな感じが急に深幸を襲った。それと同時に目の前の尚に対して激しい嫌悪感が湧き上がってきた。

(何で？ 彼とは今日初めて会ったし、嫌いになるようなことは何もなかったはずなのに)

尚の方も、大きく目を見開いている。まるで、何かに驚いたかのよう。

「おい、深幸！ 何してんだ。早く帰るぞ」

零に呼ばれて、ハッと我に帰った。急いで尚に背を向ける。

「ごめん。ちよっと待って」

その、胸に何か刺さったような不快感は、家に帰るまでずっと私の中から消えてはくれなかった。

俺——鷹見尚はよく同じ夢を見る。幼い頃から何度も何度も。そして、その夢の中で俺は——

人を殺す。

目の前には俺が殺した男が転がっている。そして、放心したように座り込んだ女性も。

不意に、女性が胸を押さえてどっと床に倒れこんだ。慌てて駆け寄ろうとしたが、体が動かない。

焦る俺を、女性は真っ直ぐに見て、何か呟いた。そして息絶えた。

そこで目が覚める。毎回だ。俺が殺した男は、そして俺に何か呟いて死んだ女性は誰なのか。

何とか調べようとしたこともあった。けれど、誰に話しても分かってもらえず、諦めていた。

今までは。

けれど今日、彼女に会って分かった。あの夢の女性だと。なぜそう思ったのかは説明できない、勘のようなものだ。

彼女も何か感じたらしい。こちらを見ていた。

(まだ確信は持てないから、明日彼女に会って確かめよう。綺麗な人だったし、知っている人は多そうだな)

本当に綺麗な人だった。白くてきめ細かい肌、さらさらと風に揺れる黒髪、こちらを真っ直ぐ見つめてくる瞳は、まるで夜を閉じ込めたようだった。

急に恥ずかしくなって、布団を被った。顔が熱い。

(ヤバい、これは——)

恋だ。